

音

音 オン・イン
訓 おと・ね

神様のお告げ

● 暗闇の中かすかな音立てる

「音楽」の「楽」は柄のある手鈴であることを前項「楽」で説明しました。舞楽の際、巫女さんがこれをふって神を楽しませたのが「楽」です。ならば「音楽」の「音」はどんな字でしょうか。ここでは、そのことを紹介しましょう。

でも「音」の字の紹介の前に「言」の説明をしたいと思います。まず「言」と「音」の古代文字を見てください。非常によく似ていますね。そのことを知ってから、以下のことを読んでください。

この「言」は神様への祈りの言葉である祝詞を入れる器「口」(サイ)の上に、入れ墨用の針「辛」を置いて、もし自分の言葉に偽りがあれば入れ墨の刑を受けることを神に誓い祈る言葉の意味します【↓「章」】。古代文字の「𠂔」(サイ)の上にある部分が、「辛」(針)です。

その祈りに神様が反応して、答えます。神様の答えはどんな形でくるかというと、夜、静かな時間に器「口」(サイ)の中にかすかな音を立てるのです。その神の答えの音が「口」の中にある横線の「一」です。それが「音」という字です。

古代文字のほろがよくわかるかもしれませんが、「言」の「𠂔」(サイ)の部分に「一」を加えた字が「音」なのです。つまり「音」とは神様のお告げのことです。

この「音」の字形をふくむ字に「闇」があります。この「門」の字形は神棚の両開きの扉(このこと)です。そこに神様への祈りの祝詞を入れる器「口」(サイ)を置き、その上に誓いの針「辛」を置いて、祈り、問うと神が夜にかすかな音で答えるのです。「問」という字は神棚(「門」)の前に「口」(サイ)を置いて神の意思を「とう」漢字です。

その時は夜で、暗闇の中で神様の意思は示されました。それを表す字が「闇」で、その時間は暗いので「やみ、くらい」の意味となりました。「暗」にも「音」の字形がありますが、これはもともと「闇」と同じ字でした。本来は神の現れる「闇」を表す字が、明暗の対比などという字に使われ出して「日」を加えた「暗」の字ができたのです。

古代文字

言

音

旧字

「音」とは神様の「音ない」(音を立てること)、神様の「おとずれ」(訪れ)のこと

旧字

暗

闇

旧字

闇

闇

【つながる漢字】 𠂔

言・音(音)・暗(暗)・門・闇(闇)・問